

故なれば也。されば良家の令嬢賓客の前に出て、琴をかなでうたを唄ふに大体調子外れの變手子言ふべからざる音聲を出す之れ稽古の足らぬ處によるも多けれど、先づ右に述ぶるが如き因縁なれば其心を以て寒に入れば寒風に向つて聲を磨く、種種々の法あり然し是は商賈人ならでは鳥渡行へぬものなれば、通例は稽古にこるより外なし、即ち稽古中、心の中に他の事を思ふ觀念なく、眞一方に師匠が發音の工合を考へ、咽喉にかます齒を挾ます舌にからます糸の音色を篤と聞分け聲の出る體體を亂さず備を正して、自分勝手に品を附けず、ゆらでも宜き處を上げ下げせず、務めて腹一ぱいに語るに於ては自然に其妙所を早く會得し發音の調子を得るは別段難き事にあらざる也。

以上を詳知して尙知らすべき事夥敷有れ共、徒らに長文に渉るの嫌あれ、其二三を摘記して本章は是れにて筆を措くん、扱前條も述

べたる体の備へとは第一心を臍下に沈め膝を割つて頭と胸部を直に置き見臺に向つて正しく坐するを備と云、又間拍子を飾らん、逆無闇に張扇子を使ふべからず、淨るりは我聲の調子より低きをわめども、一二三の音を正し咽喉も腹も盡くる程語らず、最初二の音より一三に通はすべき心得を以て程よく語るべし、世に五色の聲を出すに云ふ事あり、五色の聲とは赤黒青黃白なり、黃青白は先づ厭やな聲也、黒はさびあつて眞目を持つ赤は奇麗に美しく、花やかあるを云ふなれば、淨瑠璃には黒赤の二音を調へ尙威張る聲は宜けれと間違ふて氣張となる事あり、謹み第一の事なりと心得べし。

第七章 節附の詳解

徒らに正本の節を知らず多く年月を経ると雖、只冊數を重ねるのみにては何の詮もなき事あれども、此正本の節即ち元祖竹本義太夫及び其他の太夫が打たる物も至極儘かなるに相違なければ、目下語る處のも

海 潮 瑣 秘 傳

四十二

のは星霜の立つと共に時々の流行に伴ひ變遷に連れて、三味線の手は換はらずとも語り口は右の次第なれば必らず正本節通りには皆が皆迄行かず否行かぬのみならず儘かに或部分は違がへば甚だ目當にはからずとも目下の相當語り人はほんの心覺にに見認め置くに過ぎざるべけれど仔細に之れが吟味を要するは實に第一の事なるべし、依つて院本に附したる節附及び胡麻盤点の解釋を左に列記すれば既に附したるものも調べ又我が習得たる節も面倒がらす朱記したらんには、蓋し上達する事の一層速かなるを信するなり

第一、
すぐに語る記号なり

第二、
持ちこたふる記号なり

第三、
さぐる記号なり

第四、
さげてつ記号なり即ち第二第三を合したるものなり

海 潮 瑣 秘 傳

海 潮 瑣 秘 傳

第五、
いる、記号なりいる、とは押し込むの心なり

第六、
かす記号なり

第七、
強くかす記号なり

第八、
入れて押す記号あり

第九、
ふる記号なりふるとはゆる事なり

第十、
持つて少し押す記号なり

第十一、
呑む記号なりのむとは聲を腹よ呑み込む心の事なり

第十二、
持つてはぬる記号なり

第十三、
はやむる記号なりはやむるとは走つて語る事也

第十四、
はつてはぬる記号なり

第十五、
あぐる記号なり

海 潮 瑣 秘 傳

第十六 一 まわす記号なり

第十七 一 はねる記号なり

第十八 一 持つてゆる記号也

第八章 節の名目の詳解

右を悉く覺へ切られおは之れより例證を擧げて節の名目に附ての分解を列記せんが尤も下記の例證と雖も少々彫刻の誤りも不免又師匠名くの節附にもあり始終如此なりと斷じ難けれども只讀者は是によつて師に附て下記を標準として研究せられんことを望む

第一 一 (ハヅミブシ)

例證

何とてうらわしうて

第二 一 (ハヅミ)

例證

何とてうらわしうて

第三 一 (フシウ)

例證
〔白石
證茶々〕

何とてうらわしうて

第四 一 (ハルフシ)

例證

何とてうらわしうて

第五 一 (キシハルフシ)

例證

何とてうらわしうて

海 稻 璃 秘 傳

第六「ハルキン」

例證

ハルキンハルキンハルキンハルキン

第七「フシハル」之れ中より出る「ハルフシ」なり

例證

フシハルフシハル

第八「フルフシ」之れ「うれい」の落しにあり

例證

フルフシフルフシフルフシ

第九「ウフシ」之れ文句を必ず五文字に詰めて作る

例證

ウフシウフシウフシ
三日月 陣太鼓
嘉平治内

四十六

海 稻 璃 秘 傳

第十「本フシ」之れは種類多し「のゆり」を畧したるも有り

例證

本フシ本フシ本フシ
三日月 嘉平治内
本フシ

第十一「ニフユリ」

例證

ニフユリニフユリニフユリ

第十二「三ツユリ」之れ種々有り

例證

三ツユリ三ツユリ三ツユリ

第十三「四ツユリ」之れ種々有り

四十七

海 稻 璃 秘 傳

二二二二二
あはれん
二二二二二
あはれん
二二二二二
あはれん

第十四「本フシカ、リ」

忍び居る

第十五
「フシカ、リ」

乙カリ
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

第十六〔色〕之れ(中之)詞ことばにあらす地にあらざるなり即ち詞ことばへまづ

かりと取付く時の節也

何となく

第十七〔大落シ〕

一
え
二
三

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

第十八〔ハルタタリ〕之れ文句中(タタリ)計りとつて送るなり

第十九〔中ヲクリ〕之れ文句をとつて來て(ヲクリ)にて中に送るなり

例證
〔仙代〕

白濁の涙を流さうと大坂
 へフラリニ
 ニエ
 ャ

傳 秘 藏 溜 海

第二十「ウヲクリ」之れ文字四字にて送るなり

例證

ウヲクリ
何さあ

第廿一「スエカ、リ」〔合邦〕

例證

スエカ、リ
後海のわが

第廿二「小ヲクリ」之れ文字三字にて送るなり

例證

小ヲクリ
入

第廿三「色ヲクリ」

例證

色ヲクリ
何さあ

傳 秘 藏 溜 海

第廿四「アミト」此アミトと云へる節の名目はお通が十二段の内綱

戸云々と云へる所の節を用傳へし物也

例證

アミト
何さあ

第廿五「フシヲクリ」

例證

フシヲクリ
何さあ

第廿六「キ」

例證

キ
何さあ

第廿七〔中キ〕例證〔忠臣蔵勸腹〕

〔三吉〕

中キの三吉

第廿八〔ウキン〕

例證

〔堀川〕

ウキンの堀川

第廿九〔下キン〕

例證

〔安達〕

下キンの安達

第三十〔チン〕之れ〔中〕キン〔ウ〕にあらざるなり

第卅一〔スエテ〕之れ種々ありといへども

例證

スエテの種々あり

第卅二〔スエハル〕之れは中にて來りスエハルは〔ハル〕を附る又中にて

スエハルの文句にて〔ハル〕もあり

例證

スエテの中

第卅三〔スエカ、リ〕〔竹雀〕

例證

スエカの竹雀

第卅四〔長地〕之れは〔ハル〕チンなり文句の前にてはり置き〔長地〕にか

いる又中にてとまり〔長地〕にかいるは改めて出る心也〔長地〕ハ
ルと附る〔チン〕にかこりあり操り廻し有り〔キン〕あり何れも
中に落る

例證

おのゝあゝるゝおのゝあゝるゝおのゝあゝるゝ

〔合邦〕

おのゝあゝるゝおのゝあゝるゝ

第卅五〔コハリ〕

例證

おのゝあゝるゝおのゝあゝるゝ
とあゝるゝ

第卅六

〔トル〕〔トル三重〕

は心持ち違ひあるべし(おのゝあゝるゝ)にて來り直ち

に中フシに落すものとす

例證

〔竹雀〕

おのゝあゝるゝ

第卅七

〔中フシ〕

之れ色々あり

例證

おのゝあゝるゝ

第卅八

〔ロロイ〕

例證

おのゝあゝるゝ

第卅九

〔ノリ上〕〔野崎〕

例證

[illegible]

第四十「クリ上フシ」

例證

何とぞもよほす

第四十一〔二重落〕

例證

[illegible]

第四十二〔大三重〕〔道明寺〕

例證

何事して何事と何事と何事
え 中 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

第四十三 「しころ三重」

例証

二二三
一ニクマウ
二二三
三

何をしてどうしてとていふは、
三

第四十四

冷泉」之れも網戸と全様か通十二段の内冷泉十五夜杯云
へる姫の名也

例証

ふと流るは雨の花

第四十五〔半冷泉〕

例証

何物にや

第四十六〔スエハル〕〔日吉〕

例證

スエハル
後へ減はくこと

第四十七〔江戸冷泉〕

例證

ワハドレキイん
何とてうらわさして何とておぼて

第四十八

〔文彌〕 此節種々あり即ちノリツキユリフシハツミフシ
(地上等尙種々あり之れ岡本文彌の作りたる節なれば也其
一二を記さんに〔百度平内〕

例證

文弥
七は清人の節なり

第四十九〔大マツシ〕〔玉三〕

例證

大マツシ
多陽を

第五十〔舞〕

例證

何とておぼて何とておぼて

第五十一〔半太夫〕 之れは太夫の道中杯になるもの也

例證

何とておぼて

傳秘獨留海

妹背山四

17-11-1900

第五十二〔上、キ〕〔竹雀〕

上夕キ一

歌の網をさす

第五十三〔道具屋〕 例証 〔三日大平記嘉平治内〕

及是也
一
時
又

例證

瘡癰の毒の根を去るに
 うゐゐたもの腰は

第五十四「表具」例証「日吉丸三」

傳 秘 璃 齋 函

六十

傳秘瑤笈

例証

表具
之寸
五
品出て初くは

第五十五〔江戸〕

例証

何事にて物をかき物にふくむ

第五十六〔タ、キ〕之れ(キン)(クリ上)等種々あり

例証

[illegible]

第五十七〔タ、キ力、リ〕〔日吉三〕

例証

一
ウ
一

音の響き

傳 秘 璃 智 海

傳 秘 藥 酒 膏

六十二

例證

例証

第六十「ナチス」

例証

第六十一〔謠〕（次第）一セイ（上歌）サシクセ（道行）總て謠の通りなり

第六十二〔キンチクリ〕（堀川）

首 榴 璃 秘 傳

例証

第六十三「角太夫」

例証

第六十四「スエ」(堀川)

例証

第六十五 〔地藏經〕 例証 (彦九)

例証

六十三

傳 秘 璫 智 滴

傳 秘 璣 智 海

海 溜 璃 秘 傳

例証

第六十六〔半中〕例証（堀川）

叶ウ半中サハリ

拾ひあつたあはれ積りたるぬくぬくは涙の

例証

深きなごころはいつかあはれ物のはな

あつたあはれ物のはな

第六十七〔アタリナクリ〕

例証

あつたあはれ物のはな

海 溜 璃 秘 傳

第六十八〔ツキナクリ〕

例証

あつたあはれ物のはな

第六十九〔林清〕

例証

あつたあはれ物のはな

第七十

〔サハリ〕之れは總て他の音曲に似通ふ歌かゝりの物を他に

障れはサハリと云ふ

あつたあはれ物のはな

堀川

例証

あつたあはれ物のはな

傳 秘 璃 脂 滴

六十六

呼は性お便の授

見世のついで

海 智 瑤 秘 傳

海 智 瑤 秘 傳

合意のありき

例証

三才
たぎのり
三才
道とめ

第七十六「フシ」(合邦)

例証

ズレニ
されどあ

淨瑠璃秘傳

第七十七〔戀三重〕

例証

何やうして何やうして何やうして

第七十八〔中愁三重〕

例証

何やうして何やうして

第七十九〔吟三重〕

例証

何やうして何やうして

第八十〔ツレカ、リ〕

例証

わづのこゝろ

六十八

淨瑠璃秘傳

淨瑠璃秘傳

扱説き來り連ね來つて節の名目通計八十章の多きに達せり、尙此外乱れ吉の説經放下僧平家猛三重小室三勝ふし海道八郎兵衛ふし外記歌送り鉢たゝき狂女出七ツユリ九ツユリ杯いろくあれどあまり用されは零したるが何んと随分澤山なものに有らずや、之れを一々會得せん事社ろ淨瑠璃を學ぶと云ものにて悉く詳悉したらんには何れの淨瑠璃をも稽古するに、さして隙取る事なく又才力の免す限りは自分が淨瑠璃を作り出す事さして難からざるべし、元來淨瑠璃の節は二十四節の物にてサワリを加へて四十八節となり、尙太夫の發明流行を加へて遂に以上の如く數多の節となれり、實に之れを覺へ切らん事非常の煩雜を感じるに相違なけれど、倦ますたゆまず淨瑠璃を稽古せんより初めは節を習得すべき事勸要なり、尤も此淨瑠璃たるや謠曲の如く定たる家元のあるにあらずれば、如何なる事を呻るとも鎗を食ふは格別面と向つて批難する人はなけれど、當地の如き流行の地は素人にも太

六十九

淨瑠璃秘傳

夫に超ゆる程の語り人あれば、輕忽に吟味を盡さず語るべからず心ある人は腹裡に冷笑を催すに相違なし。豈に六つヶ歌藝にあらすや、宜く詳知せられん事を希望して止まざる也。

第九章 自作淨瑠璃節配り心得の事

太夫には太夫代々の秘傳とて種々の傳授あり、何れも見る處ろ説く處は多少の相違ありと雖も、大体は格別の相違なしと考へたり。尤此淨瑠璃に於ての節と陰陽の五行を表し、年中の四候七十二氣を象り、全体の首足整はざれば淨瑠璃とならず、去るによつて或る部分は春の如く一陽來復萬物氣朗か、優美にして物浮めかしく、或る部分は夏の如く火炎の立昇るが如きなれば、戰軍修羅あり、物凄まじく血氣熾なるべく、或る部分は秋の如く金氣殺伐の氣候なれば、萬物色を失して物淋び枯れ行く有様即ち哀傷腸を斷の歎曲調ふべく、或る部分は冬の如く四邊氷閉て寒風孤林の月を磨くが如く、寂寥閑靜物まめやかに音無しかるべしとや、去れば

自分が淨瑠璃を作くるに於ては、必ずく左の心得あるべし。其二三の例を擧んに

節の跡は改むる心あれば、**心は中心をみれば** など、付べし。詞より地へかゝるには、**んんん** 等の類にて付けべし。

就中女のたをやかなる文句と位ある文句は、**むす** 然るべし。

ウはハルにウあり中又ウあり依つて句切毎にウ付けるに及ばず、余は胡磨章にてしらすべし。

ハルの内にあたりある節は、一如此打つて知らすべし。中の内に下る心持ある節は、一如此打つて知らすべし。

節跡に地色付けるに句切りの内に詞に移る時は、詞落しに付べし。色は二重となるなり併し句切換れば差支なし。

第十章 三味線の事

抑もく義太夫節の三味線は元來音色厚變にしてありと有らゆる社會